二次障害を予防する為に障害を理解しよう！

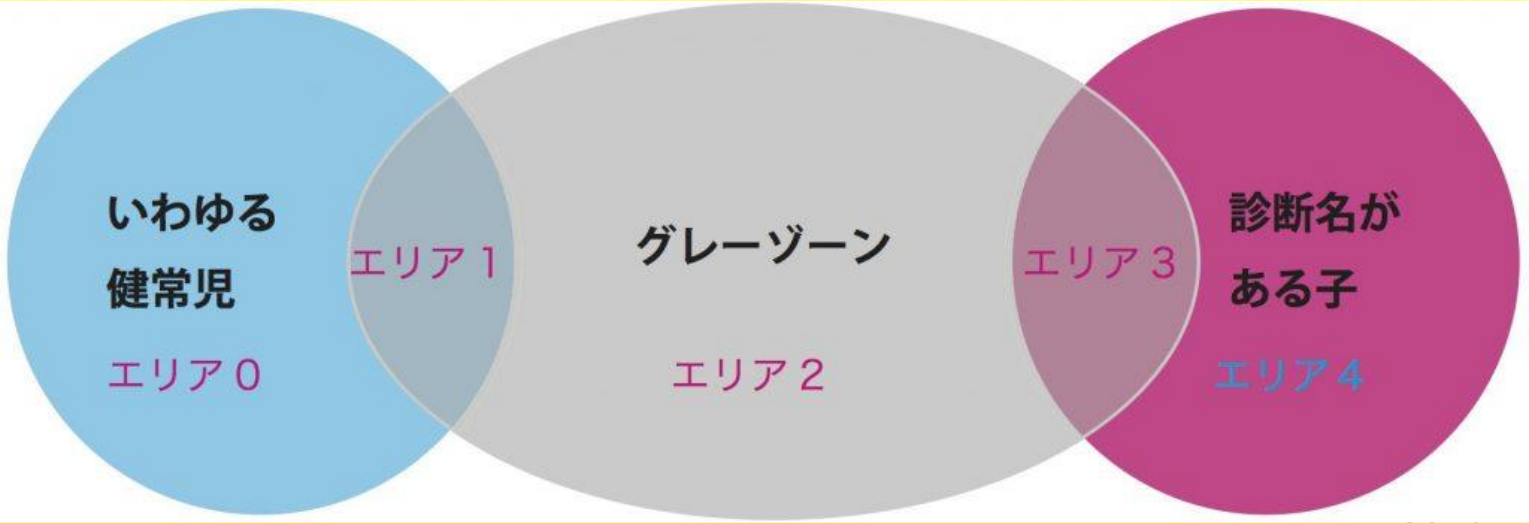
障害を理解する事が最大の
支援になります。

目次

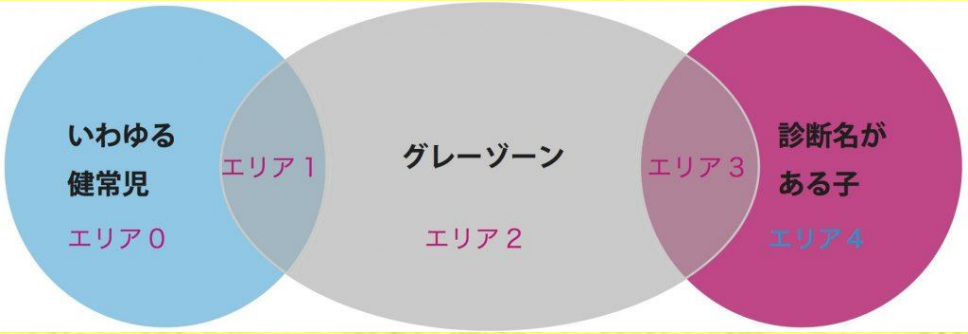
- エリア分けで解説！発達障害の程度をグレーの濃さで理解
- 「発達障害」の診断にはどんなタイプがあるの？
- 障害を知ろう！
  発達障害を強みにつける
- 特性チェックリスト

● エリア分けで解説！発達障害の程度を
● グレーの濃さで理解

- 発達障害と診断がついた子と、いわゆる健常児の間には、明らかな区切りがあるわけではありません。どちらにも重なるグレーゾーンの子もいて、障害があるとは言えないけれど、「苦手」や「困った」を抱えて、苦労していることもあります。下図はグレーゾーンの中のグレーの濃さをエリア分けしたものです。



出典：小学館Hagkum



- **エリア０　いわゆる健常児**
- 一斉指導でも理解できる従来の保育・教育が通用する子。例えば、ひとことで指示がわかる。ルールが守れる。集中力がある。相手の気持ちがわかるなどの子です。ある意味では、指導する先生の力量の足りなさを補ってくれる力（その時、その場、その状況に合わせる力＝適応力）が豊かに備わっている子ども達です。

- **エリア１　やや不器用な子**
- 診断名はつかないけれど、不器用さやおっちょこちょいさを感じさせる子。性格や個性と捉えられ、丁寧に接すれば適応できる。
- **エリア２　集団行動が困難な子**
- 診断はつかないけど、ルールを守れなかったり対人関係でトラブルがあるなど、集団行動からはみだしやすい子。
- **エリア３　「発達障害」の診断がつく子**
- 「発達障害」（アスペルガー症候群、注意欠陥多動性障害、学習障害など）の診断名がつく子。文部科学省調査(2012年)の推定で通常学級の6～７％。
- **エリア４　「知的障害」の診断がつく子**
- 脳性麻痺やダウン症、知的障害などの診断がついている子

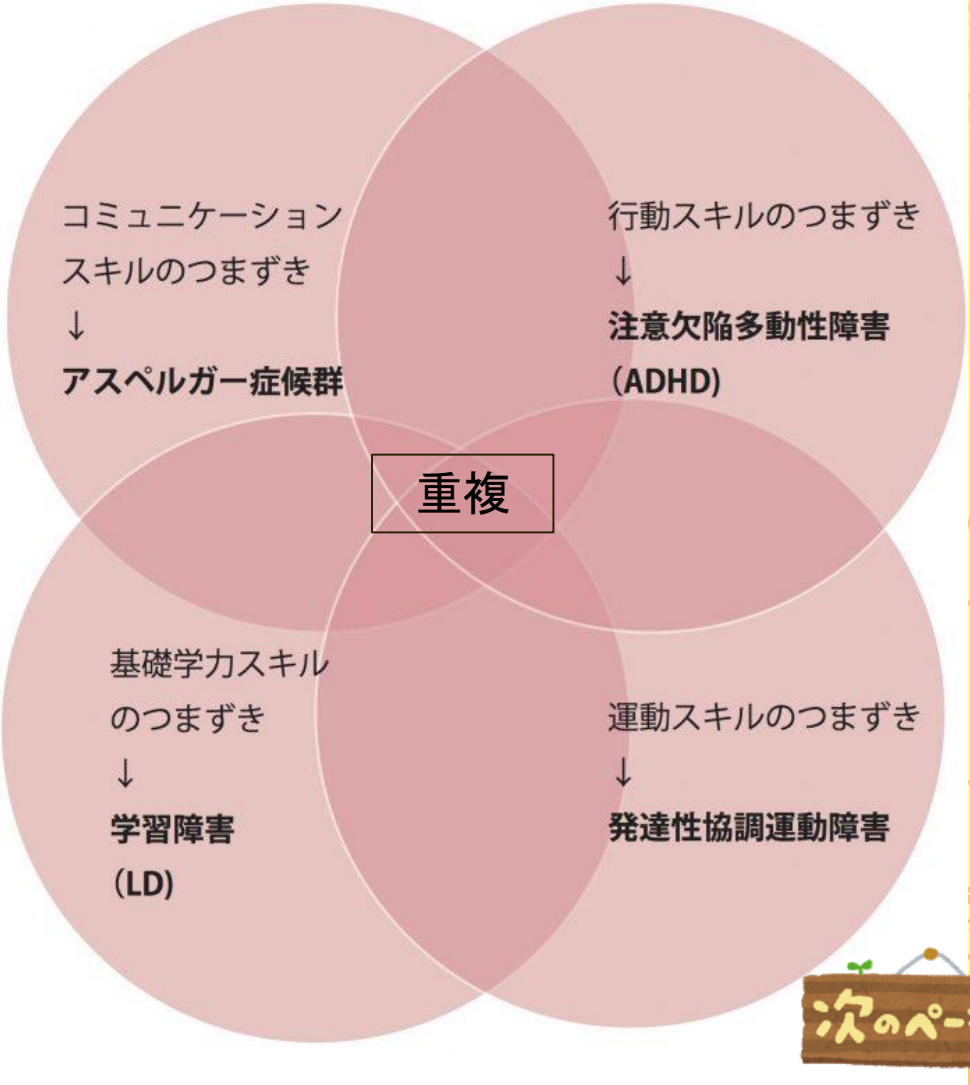
出典：小学館Hagkum

「発達障害」の診断にはどんなタイプがあるの？

発達障害やグレーゾーンといわれる子どもたちは、いろいろな特性があります。それは「適応能力」につまずきがあるということ。右図は適応能力を４つにわけ、つまずきがどんな診断名につながりやすいかを示したものです。円が重なっているのは、つまずきがひとりの子に混在して現れやすいためです。

重複。

例えば、空気が読めない子が不器用さを合わせもったり、多動な子が特定の学習が極端　に苦手なことなどがあります。



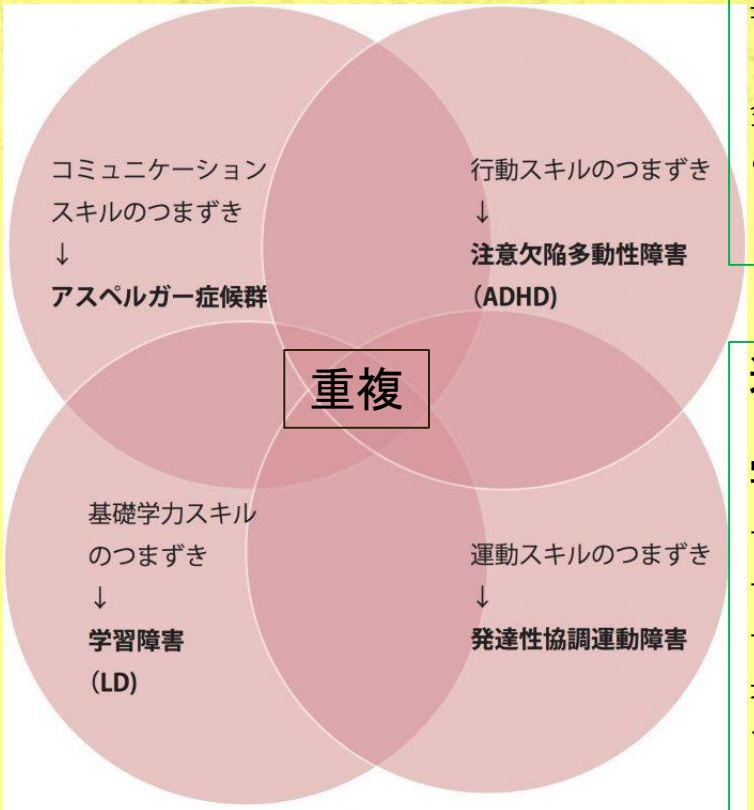
出典：小学館Hagkumをもとに報告者作成

次のページ

コミュニケーションスキルのつまずき
＞＞アスペルガー症候群
相手の意図や気持ちを察する力が弱く、自分の思いを相手に伝えることも難しい。興味や関心の幅が狭いことと、記憶力に長けていることから、マニアックな世界を持っている子どもが多くいます。

行動スキルのづまずき

＞＞注意欠陥多動性障害（ADHD）
注意の集中・持続力にかけていて、衝動的に行動したり、じっくり考えることが苦手。その分、行動力はあり、またひらめきは豊かで発想が豊かな子ども達でもあります。



基礎学力スキルのつまずき
＞＞学習障害（LD）
読み書き、計算、聞く、語るなど、基礎学力を支える一部、もしくはいくつかの柱につまずきがある。協調運動障害と同様に、的外れの学習努力を強いられることで、該当教科が苦手になったり、学ぶこと自体の意欲の低下が生じやすい子ども達です。

運動スキルのつまずき
＞＞発達性協調運動障害
手足や体など、全身を手順よく動かすのが苦手。手先が不器用。結果的に、自信をなくしやすかったり、チャレンジせずにはじめからあきらめてしまうことを誤学習しやすい子どもたちです。

出典：小学館Hagkumをもとに報告者作成

名称がＬＤからＳＬＤになりました。

以前は「学習障害（LD）」と呼ばれていました。
学習障害では「勉強全般が出来ない・支障がある」というニュアンスで受け取られやすいため、限局性学習障害（SLD）と改める事で「特定の限られた分野の学習にのみ問題がある」という意味の名称に変更されました。

ＳＬＤは「読み」「書き」「計算」の一部の能力だけに困難が生じます。
読む能力はあっても書くのが苦手、他の教科は問題が無いのに数学だけは理解出来ないなど、ある特定分野に偏りが見られます。知的発達に大きな遅れはありません。
　的確な診断・検査が必要で、ひとりひとりの能力に応じた対応策が求められます。ADHD・高機能自閉症などを伴う場合には、それらを考慮した学習支援も必要で、家庭・学校・医療関係者の連携が欠かせません。

次のページのチェック表でチェックしてみましょう。
SLDの直接の原因は、中枢神経系の何らかの機能障害によるものと考えられています。
障害は病気ではありません。気になる方は医師の診断を。

*出典：「発達障がい専門誌　きらり」をもとに報告者作成

ＳＬＤ　限局性学習症

書き

- □ 形の似た文字や漢字を書き間違う
- □ 漢字のへんとつくりを間違う
- □ 意味や音が似ている漢字を間違う
- □ 画数の多い漢字に誤りが多い
- □ 鏡文字を書く
- □ 句読点を忘れる
- □ 板書を書き写せない、時間がかかる
- □ 促音（っ）・撥音（ん）など特殊音節の誤りが多い
- □ 耳で聞くと同じ音（「オン」）の表記に誤りが多い
- □ 文字の大きさがバラバラ
- □ マスや罫線からはみ出す
- □ 文字のバランスが悪い
- □ 主語・述語などの文法構造の理解が難しい
- □ 助詞の誤用が多い
- □ 文章（作文）を書くことが難しい

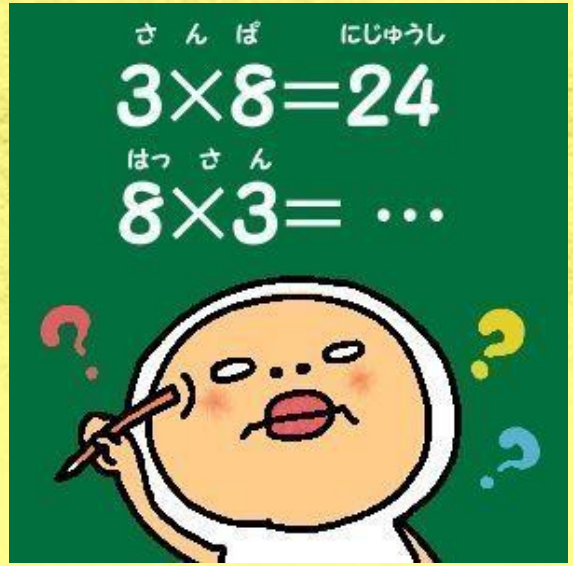
聞く・話す

- □ 聞き間違いが多い
- □ 筋道立てて話すことができない
- □ 言いたいことを言葉で表現できない
- □ 相手の言うことが理解できない
- □ 内容は近いが聞いた通りに書けない
- □ 話しているうちに内容がそれてしまう

*出典：「発達障がい専門誌　きらり」をもとに報告者作成

計算・推論

- □ 指を使わないと計算できない
- □ 位取りを間違う
- □ 文章問題が解けない
- □ 図形・表・グラフなどが理解できない
- □ 図形を描いたりすることが難しい
- □ 時計が読めない、時間が分からない
- □ 筆算をするときに数字がずれて間違えてしまう



読み

- □ 幼児期には文字に興味がないし、覚えようとしない
- □ 意味で区切ることができず、1文字ずつ読む
- □ 話あるいは文節の途中で区切ってしまう
- □ 文字や行を飛ばして読む
- □ 形の似た文字を読み間違う
- □ 拗音（ゃゅょ）、促音（っ）など特殊音節を発音できない
- □ 文字を単語や文として読むことが難しい
- □ 内容を理解することが難しい
- □ 読んでいるところを確認するように指で押さえながら読む
- □ 文字間や行間を狭くするとさらに読みにくくなる
- □ 初期には音読よりも黙読が苦手である
- □ 一度、音読して内容理解ができると
2回目以降の読みは比較的スムーズになる
- □ 文末などは適当に自分で変えて読んでしまう
- □ 本を読んでいるとすぐに疲れてしまう

*出典：「発達障がい専門誌　きらり」をもとに報告者作成